

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K03105

研究課題名（和文）成立期のドイツ緑の党における価値保守主義的潮流 日独比較市民社会史的視点から

研究課題名（英文）Value-conservative currents in the German Green Party during its formative years: From a comparative Japanese-German civil society historical perspective

研究代表者

中田 潤（NAKATA, JUN）

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40332548

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では1970年代後半から1990年のドイツの再統一の時期までの「緑の運動」を分析対象とした。その中で1970年代後半から興隆してきた「運動」と1970年代末から始まる「制度化（＝政党化）」という2つの潮流の相互の影響について実証的に解明した。また制度化の動きの中で、「保守革命」「農業ロマン主義」「価値保守主義」「人智学」「（非）教条主義的新左翼」といった、一部は19世紀にまで遡ることが可能な思想潮流がその中に流入していった事実も指摘した。それまで対極に位置すると見なされていたそれぞれの思想が前提とする社会観・社会秩序観の相違は党内に深刻な内部対立をもたらすことになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツにおける緑の党という政党組織の結成過程を市民運動との連続性・断絶性という観点から実証的に解明した研究は我が国においては唯一独自のものである。

それと同時に本研究は、参加型民主主義社会の実現に向けた一つの事例をその可能性と問題点を含めて具体的に提示している。その意味で、ポスト経済成長至上主義社会、ないしは国家主導型の福祉社会の危機を迎えつつある我が国の新たなガバナンスモデルを考える上で、極めて高い社会的意義を有していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project analyses the 'Green Movement' from the late 1970s to the German reunification in 1990. It empirically elucidated the mutual influence of two trends: the 'movement' that emerged in the late 1970s and the 'institutionalisation' (i.e. party formation) that began at the end of the 1970s. It also pointed out the fact that, in the process of institutionalisation, there was an influx of ideological currents such as the 'conservative revolution', 'agrarian romanticism', 'value conservatism', 'anthroposophy' and the (non-)dogmatic New Left, some of which can be traced back to the 19th century. The differences in the views of society and social order assumed by these ideologies, which until then had been regarded as opposite poles, led to serious internal conflicts within the party.

研究分野：ヨーロッパ史（ドイツ現代史）

キーワード：価値保守主義 新しい社会運動 エコロジー 緑の党 左派オルタナティブ 市民社会 ドイツ 協同主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

市民社会論の系譜：1970年代前半頃から西ヨーロッパ諸国を中心に成立してきた「新しい社会運動」と呼ばれる、非営利的・非国家的な自発的組織を通じた市民の政治参画の動きに対して近年研究者の注目が高まってきている。その際に市民という概念は、政治経済史研究においてブルジョワジーという概念で理解されてきたものとは異なる、citoyen, Staatsbürger の語が内包する側面が強調された形で使用される。例えば J. Habermas, J. Cohen, A. Arato といった（アメリカ・）フランクフルト学派による討議デモクラシー論や公共性論、R. Putnam などによる社会関係資本論、M. Walzer, M. Sandel らのコミュニタリズム論などの、主として政治哲学・政治学および社会学研究がこの系譜に属する。彼らは、大衆消費社会が成立した時代における公共空間への参画・形成の主体としての「市民の運動」という側面に関心を置いている。

社会運動論の系譜：A. Doering-Manteuffel, M. Geyer, U. Herbert, E. Wolfrum らによる 1960～80年代論研究は、1970年代前半頃からのドイツ連邦共和国の社会構造の変化の具現化の一側面として「新しい社会運動」を理解している。彼らによれば、緑の党成立をめぐる一連の動きは、社会運動の構造変化として捉えられるものであった。

ドイツにおける新しい社会運動の隆盛と緑の党の成立は、こうした市民社会論と社会運動論の接点に位置するテーマであるにもかかわらず、社会運動・労働運動研究の豊かな伝統を有する我が国の歴史学研究において、なお本格的な研究対象となっていない。そこで前回採択された課題では、こうした認識から、新しい社会運動についての実証研究に取り組んできた。今回の申請課題は、その継続・発展を目指し、新しい社会運動の一つの発展形態としての（環境）政党の結成という現象の解明に力点を置いた。こうした研究重点形成の背景には、緑の党研究が主として政治学研究によって進められてきたために（例えば van Huellen, Markovits, Raschke, 遠藤マリヤ, 仲井斌, 永井清彦など）、社会運動との連続性の側面ないし社会の構造変化の反映としてのハイポリティックスのあり方に着目した、いわゆる歴史学的な視点が弱いという申請者の認識がある。

2. 研究の目的

研究の目的は以下の3点に要約される： 緑の党の成立には、我が国の先行研究での主張と異なり「価値保守主義」と呼ばれる理念が、極めて大きな影響力を果たしていた。この思想潮流・勢力が掲げていた社会秩序理念を解明する。緑の党は底辺民主主義を基本理念として掲げて成立した。そこには1970年代以降成立したいわゆる「新しい社会運動」が大きな影響を果たしたという事情があった。そこで従来の研究では手薄であった、緑の党の社会運動との連続性という視点から、（前身組織を含めた）組織構造、人的ネットワーク、メンバーの社会構成、運動の思想的背景および活動戦略等を解明する。上記の作業を通して、1960年代後半から1980年代前半という時代のドイツ（連邦共和国）の社会および政治文化の総体的な把握を試みる。

具体的には以下の4点に焦点を設定して研究を進めていく。

(1) 価値保守主義という思想を、その歴史的起源および思想内容の歴史的な変化を見据えながら、19世紀後半以降のドイツの工業化への反作用という長期的な文脈から解明していく予定である。

(2) 価値保守主義を具体的に体現してきた人物ないし組織の活動に関して、1960～80年代前半までの時期を中心に、再構成する予定である。中心的な分析対象は B. Springmann, H. Gruhl, E. Eppler, そして「緑の行動・未来(GAZ)」、「緑のリスト・環境保護(GLU)」などの組織を予定している。

(3) 全国政党として緑の党が成立していくプロセスを、価値保守主義的潮流を含めた様々な思想潮流相互の、そして指導部勢力と社会運動を拠り所にする各地方組織との間のヘゲモニー争いという視点から再構成していく予定である。

(4) 1960～1980年代の社会構造変化と新しい社会運動の隆盛および緑の党の成立という現象の間にあるメタヒストリー的な把握の枠組みの構築の試み。ここではドイツ戦後史研究者の多くが主張する「コンセンサス自由主義」という社会秩序への反発、ないしその揺らぎへの対応として社会運動や緑の党を理解するという視点から、この時代を分析する枠組みを提起していく予定である。そこでは、経済成長至上主義・市場原理主義的な社会秩序へのオルタナティブとしての地域主義・協同主義的社会秩序の模索というメタ枠組みが提起される予定である。

歴史学研究、とりわけ社会史・社会運動史研究という視点から見ると、緑の党についての研究は、我が国においては、なお未開の領域である。政治学およびジャーナリズム的視点からの論考は存在するものの（例えば小野一、西田慎、保坂稔など）、社会運動との密接かつ複雑な関わりを視野に入れながら、それを実証的に描き出した研究は皆無である。本研究の独創性の第一は、多くの地域レベルでの運動家が遺した史料に基づき（申請者は、現時点では我が国の研究者としてトップレベルで史料を収集しているという自負がある）、社会運動との複雑な関係の中で成立していくプロセスを、政治社会史的な視点から実証的に解明するという点にある。

また一つの時代区分としての「長い1960年代」(A. Schildt)という枠組みでドイツ戦後史を把握し、叙述するという営みも我が国においては、まだ端緒についたばかりである。この時期の

歴史的な位置づけは、1930～40年代を射程とする総力戦体制論（雨宮、山之内など）と1950～70年代を射程とする自由主義コンセンサス（ないしライン型資本主義）論（Doering-Manteuffel, Angster など）との連続性・非連続性を巡る文脈の中で、西欧研究者の中で極めて大きな関心を集めている問題であり、我が国においても近年注目を集め始めている（例えば小野清美の諸論考ならびに申請者研究業績2）。本研究の独創性の第二は、「新しい社会運動」および緑の党が追求した社会秩序構想・理念を分析していくという手法を通して、20世紀における社会構造ならびに政治システムの中長期的な変動の歴史的な意味付けをめぐる議論に一石を投じる点にある。

3. 研究の方法

具体的な研究作業は、主として以下の5点に要約される。

(1) B. Springmann, H. Gruhl などの価値保守主義者の思想体系の解明：ドイツ国内の図書館・文書館等に所蔵されている彼らの著作・講演原稿等を収集・分析する。(2) GAZ, GLU, AUD といった価値保守主義的傾向を体現していた緑の党の前身組織の活動および、党成立後の党内潮流について、ハインリヒ・ベル財団所蔵史料を中心に分析する。(3) 市民イニシアティブおよび緑の党の成立当時の活動家や関係者に対するインタビュー。(4) 「新しい社会運動」ならびに成立期の緑の党の活動について、当時の新聞を中心としたメディア報道の分析。(5) 上記の作業を通して得られた知見を、日本の市民活動の事例と比較し、双方の特徴を分析する。

(1) 価値保守主義者の思想体系を解明するための彼らの著作・講演原稿等の収集・分析：「自然保護・人文主義・連帯に基づく共同体の維持」(E. Eppler) を原則とする価値保守主義という理念は、1970年代以降使用され始めた概念であるが、生産力至上主義や市場原理主義的傾向への批判的な志向を持つがゆえに、19世紀末以降の産業社会批判を軸とする言説との間に複雑な関係を有している（こうした指摘については、例えば U. Linse, F. Uekötter, 藤原辰史, 小野清美の研究を参照）。B. Springmann, H. Gruhl そして A. Haußleiter などの価値保守主義者が遺した多くの著作・講演原稿を分析することで、彼らの思想体系の全体像およびその思想形成のプロセスを辿り、人間社会と自然環境をめぐる議論の歴史における彼らの思想の位置（例えばナチズムの「血と土の思想」との関係）を検討していく予定である。代表的なものとして以下の文献を念頭に置いている：Springmann: Bauer mit Leib und Seele, Gruhl: Ein Planet wird geplündert; Überleben ist alles, Haußleiter: Bewußtseinswandel bei konstanten Positionen。

(2) 価値保守主義的傾向を体現していた緑の党の前身組織の活動の分析：1970年代に入ると、主として環境問題、女性解放、住宅問題に対する関心から多くの市民運動が成立し、またその一部は政党化を目指して積極的に活動していく。こうした組織の中でも、本研究の中心に位置する価値保守主義的傾向を持ったものとして「緑の行動・未来(GAZ)」、「緑のリスト・環境保護(GLU)」、「独立ドイツ人行動共同体(AUD)」などを挙げることができるが、これらの組織は、膨大な量の出版物・パンフレット、ニュースレターなどを発行していた。ベルリンにあるハインリヒ・ベル財団文書館(Archiv Grünes Gedächtnis Heinrich Böll Stiftung)は、これらに関する膨大な史料を所蔵している。申請者は、上記の組織のシュレスヴィヒ=ホルシュタインおよびニーダーザクセン州における活動について予備調査を実施し、有用な史料の所在を確認している（例えば A-Gerald Häfner: 12 GAZ, A-Wilhelm Knabe: 654 GLSH, ZS 441: Grüne Lieste Schleswig-Holstein (GLSH) Mitgliederrundbrief など）。また同文書館は、成立期の党の指導的人物であったペトラ・ケリーが収集していた文書も大量に所蔵しており、これも上記の組織の活動を知る上で貴重な資料である（例えば A-Petra Kelly: 2301 (SPV) Die Grünen 1978-1979）。

さらに緑の党の結成に際して価値保守主義勢力と熾烈な主導権争いを展開した勢力として、非教条主義的左翼および共産党系の組織の存在があった。彼らの存在は、価値保守主義勢力の行動に決定的な影響を与えており、その分析もまた不可欠である。幸いハンブルクにある社会研究所文書館やベルリン自由大学に付属する議会外運動・社会運動文書館などが、こうした左翼系組織に関する文書を所蔵しており、これらも積極的に利用していく予定である。

(3) 市民イニシアティブおよび緑の党の成立当時の活動家や関係者に対するインタビュー：文書館での予備調査ならびにドイツ人研究者から提供された情報を吟味した結果、党の成立に重要な役割を果たした活動家十数名をリストアップすることができた。またその一部にはすでにインタビューの依頼を行っている。彼らの多くは、ドイツ各地で社会運動や党組織が草の根的に成立するプロセスで重要な役割を果たしていた。その意味で、彼らに対するインタビューは、史料が断片的にしか残っていない底辺組織の活動の実態をオーラルヒストリー的に解明する上で極めて重要である。

(4) メディア報道の分析：長期的に続いてきた連邦共和国の政党配置図に変化をもたらす可能性があった緑の党は、当時のメディアにおいても大きな関心を集めていた。また活動の主体の側も、デモ活動の情報を事前にメディアにリークするような例に見られるように、現代社会におけるマスメディアの持つ影響力を不断に意識しながら活動を展開していた。そこで当時の新聞報道を中心にメディア分析も行う。この作業に関しても、すでに予備的な調査を行っている。現時点において、保守系高級紙である FAZ 紙上において、市民運動に関して報道された記事全てを1949年11月から全国組織として緑の党が結成された1980年まで収集した。また新しい社会運動が、自らの活動の普及・相互コミュニケーションのために創刊した日刊紙 TAZ も創刊号から入手している。またハンブルクに関しては、Hamburger Abendblatt, Hamburger Morgenpost などの全ハンブルクレベルの地方紙および Harburger Wochenblatt, Harburger Anzeige und

Nachrichten 等の州内の区レベルを対象とした新聞が、各種の市民イニシアティブについて、相当な分量にわたる報道を行っていたことを確認している。上記の新聞資料はハンブルク大学図書館、ハンブルク州議会図書館ならびに州立中央文書館においてほぼ全て閲覧可能であることを確認しており、これらの施設に所蔵された資料を利用して研究を進める予定である。シュレスヴィヒ=ホルシュタイン、ニーダーザクセンに関しては、資料の所蔵場所を含め今後調査を進める。

(5)日独比較：申請者は本務校における研究・教育プロジェクトの一環として、これまで国内の様々な市民活動の事例に対する調査を行ってきた。こうした調査で得られたデータとドイツの事例を比較検討することで、双方の市民社会の特質について検討していく。

4. 研究成果

研究の最終年度である 2022 年度は、これまでの研究成果をまとめ、中田 潤『ドイツ緑の党の現代史 1970 年代から再統一まで 価値保守主義・左派オルタナティブと協同主義的市民社会』（吉田書店）として 2023 年 6 月に刊行することになっている。本研究課題の最終成果である上記の著作では、1970 年代後半から 1990 年のドイツの再統一の時期までの「緑の運動」を分析対象とした。その中で 1970 年代後半から興隆してきた「運動」と 1970 年代末から始まる「制度化(=政党化)」という 2 つの潮流の相互の影響について実証的に解明した。また緑の党という制度化の動きの中で、「保守革命」「農業ロマン主義」「価値保守主義」「人智学」「エコロジー社会主義」「(非) 教条主義的新左翼」といった、一部は 19 世紀にまで遡ることが可能な思想潮流がその中に流入していった事実も指摘した。それまで対極に位置すると見なされていたそれぞれの思想が前提とする社会観・社会秩序観の相違を主たる原因として、再統一までの時期の緑の党は、深刻な内部対立に苦しんでいた。

こうした緑の運動および形成期の緑の党の活動を分析した結果、左派オルタナティブと呼ばれる人々の(政治)活動およびその背景にある思想が、その方向性を規定していく上で大きな役割を果たしていたことが明らかになった。そこで今後の研究を展開する上で、左派オルタナティブと呼ばれる人々について、その思想面、活動の目標や実態、担い手たちの社会構成等に関して分析していくことが重要であると考えている。

【一次史料】

Archiv für Grünes Gedächtnis in Berlin: Heinrich Böll Stiftung (AGG)

- A-Bannas, Günter, Nr. 10, 25
- A-Bartelheimer, Peter, Nr. 40
- A-Beckmann, Lukas, Nr. 203, 204
- A-Conrad, Ulrich, Nr. 1.
- A-Häfner, Gerald, Nr. 12.
- A-Kerschgens, Karl, Nr. 1.
- A-Knabe, Wilhelm, Nr. 64,
- A-Krieger, Verena, Nr. 20
- A-Nickels, Christa, N. 11, 113
- A-Raschke, Joachim, Nr. 87
- A-Saibold, Hannelore, Nr. 139.
- B.I.1, Nr. 1384
- B.II.1, Nr. 334, 2138, 2265, 2325
- G.01-FU Berlin, Spezialarchiv „Die Grünen“, Nr. 58, 59

Archiv für Christlich-Demokratische Politik der Konrad-Adenauer-Stiftung Sankt Augustin
- 01-699 Nachlass Gruhl, Herbert.

Gorleben-Archiv in Lüchow

- 101 Marianne Fritzen, Nr. 5, 18, 21, 23, 26, 35, 41, 56, 86, 108, 111, 181, 188, 192, 221, 327, 357
- Bürgerinitiative Südheide (未整理)
- 102 Lilo Wollny, Nr. 119
- Nachlass: Martin Mombauer (未整理)

Niedersächsisches Landesarchiv, Hauptarchiv in Hannover (NLA, HA)

- V.V.P. 56, Acc. 25/86 (Grüne Liste Umweltschutz), Nr. 2, 76, 77 78, 79, 84
- V.V.P. 57 (Die Grünen, Landesverband Niedersachsen), Nr. 1, 2, 4, 7, 8, 9, 10, 11, 15, 16, 17, 22
- ZGS 7, Nr. 14
- Nds. 100, Acc. 149/97 (Niedersächsisches Innenministerium), Nr. 117

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 1
2. 論文標題 緑のリスト・環境保護/ 緑の党の党员・支持者とはどのような人々だったのか？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文社会科学論集 = Studies in Humanities and Social Sciences	6. 最初と最後の頁 137-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00019933	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 7号
2. 論文標題 「緑のリスト・環境保護」内の路線対立 抗議政党から世界観政党へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 6
2. 論文標題 緑のリスト環境保護（Grüne Liste Umweltschutz）の成立 市民運動からエコロジー政党へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 33-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 4
2. 論文標題 新しい社会運動としての環境保護市民運動（Bürgerinitiative） ニーダーザクセン州における原子力関連施設建設反対運動を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 67-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 乾 康代, 中田 潤	4. 巻 68
2. 論文標題 ドイツ・ルプミン村民に対するアンケート調査結果 グライフスヴァルト原発の廃炉と地域振興について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・芸術	6. 最初と最後の頁 101-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 3
2. 論文標題 ドイツ緑の党の党内再編 原理派の影響力喪失とベルリンの壁崩壊の影響を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 33-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 2
2. 論文標題 ドイツ緑の党の党内再編 : 左派フォーラムと出発派の動きを中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中田 潤	4. 巻 1
2. 論文標題 シュタットラード・ハンブルク (StadtRAD Hamburg) ドイツにおけるモバイル・シェアリング	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツにおける再生可能エネルギーの実情とその歴史的背景
3. 学会等名 環境を良くする会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツにおける市民社会(Zivilgesellschaft) その理論的な背景と活動状況
3. 学会等名 茨城県退職校長会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 Christian W. Spang: Werner und Wiltrud Preibisch in Yamaguchi, 1936-1945へのコメント
3. 学会等名 OAG
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツ緑の党の現代史 1970年代から再統一まで 価値保守主義・左派オルタナティブと協同主義的市民社会
3. 学会等名 北多摩文明フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツ緑の党の現代史 1970年代から再統一まで 価値保守主義・左派オルタナティブと協同主義的市民社会
3. 学会等名 協同主義研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 「社会運動と環境・民主主義 新自由主義自体の民衆像を求めて」へのコメント
3. 学会等名 歴史学研究会現代史部会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 「68年運動以後の西ドイツにおけるローカルな運動 - キンダーラーデンとユーズーに注目して - 」へのコメント
3. 学会等名 現代史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 「戦時期「グレーゾーン」を架橋する 東アジア・欧州の被占領地からの視点」へのコメント
3. 学会等名 グレーゾーン研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 「メガプロジェクト進行中/フランスにおける放射性廃棄物管理のガバナンス」 および「最終処分場をめぐる議論(ドイツ)」へのコメント
3. 学会等名 放射性廃棄物問題研究会第4回(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 「緑のリスト・環境保護」の成立 市民運動からエコロジー政党へ
3. 学会等名 日本西洋史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツ近現代史における協同主義 - 「緑の党」の歴史的な位相に関する試論-
3. 学会等名 協同主義研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツ緑の党の党内再編 左派フォーラムと出発派の動向を中心に
3. 学会等名 日本西洋史学会第68回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 新しい社会運動としての環境保護市民運動(Buergerinitiative) ニーダーザクセン州における原子力関連施設建設反対運動を事例に
3. 学会等名 1970年代ヨーロッパにおけ民主主義の「リベラル」化研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中田 潤
2. 発表標題 ドイツにおける協同性について その歴史と現在 ヴォバーン地区を題材に
3. 学会等名 都市の共同性研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中田 潤	4. 発行年 2023年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 450
3. 書名 ドイツ緑の党の現代史 1970年代から再統一まで 価値保守主義・左派オルタナティブと協同主義的市民社会	

1. 著者名 中田 潤	4. 発行年 2018年
2. 出版社 茨城大学人文社会科学部市民共創教育研究センター研究報告書	5. 総ページ数 18
3. 書名 「ドイツにおける協同性について その歴史と現在 ヴォバーン地区を題材に」 『まちづくりと市民協同性』	

1. 著者名 Jun Nakata	4. 発行年 2018年
2. 出版社 KZ-Gedenkstaette Neuengamme	5. 総ページ数 10
3. 書名 KZ-Gedenkstaette Neuengamme	

1. 著者名 Jun Nakata	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Verlag Ferdinand Schoeningh GmbH	5. 総ページ数 10
3. 書名 Korporatismus und Liberalismus in Kriegs- und Nachkriegszeit. Ordnungskonzepte in Japan zwischen den 1930er und 1950er Jahren“, in: Jonas, Michael u. a. (Hrsg.), Dynamiken der Gewalt. Krieg im Spannungsfeld von Politik, Ideologie und Gesellschaft	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------